玉フ自今以後十符カイ屋敷ヲ十符谷屋敷ト言フヘシ且此地名所荒廃セサル様ニ菅ヲモ栽立ヘキ旨柴田中務ヲ以テ邑ノ代官及村中ノ者共ニ命セラル』とある。その後の状態を明和9年〔1772〕の「封内風土記」（田辺希文）について見ると次の通りである。『十府池。名跡志曰。岩切農家高森館下有小池。池中有垂柳。柳下菅草頗多。郷人謂之十符菅。〔下略〕』。十符の菅薦の「十府谷屋敷」跡は岩切城（高森城）址の南下で、現在は人家が密集し、わずかに稲荷の小祠がそのあとを示しているに過ぎない。

資料　北上市史第4巻（北上市編）
金ケ崎町史（金ケ崎町史編纂委員会編）
関址と藩界、増補改訂版（岩田孝三）
仙台郷土史夜話（三原良吉）
南部伊達両藩境塚－北上川以西の部（岩手県教育委員会）
流域をたどる歴史第2巻（豊田武等編）

104　「しろばか」について

問　仙台市内の料理屋などに「しろばか」の写真を掲げてあるのをよく見かけます。この「しろばか」とはどういう人物ですか。

答　「しろばか」と呼ばれる人物は芳賀四郎のことで「仙台人名大辞書」（菊田定郷）に次の通り採録されています。

『四郎　白痴。四郎馬鹿を以て其名四方に著わる。仙台北一番丁鉄砲師芳賀某の子なり。其家火の見櫓の下にあるを以て櫓下四郎と呼ばれる。性痴愚東西黒白をも弁ぜざれども好奇者の愛憐を受くる四郎(1)の如き蓋し稀なり。明治三十五年頃、四十七歳にて福島県須賀川町(2)にて死せりと云ふ。』

四郎の名が如何に有名であったかについては「宮城人物見立」（明治15年4月）に『馬鹿　櫓下四郎　木屋先生』とあり、また「仙台消防誌」（仙台消防組編、昭和10年刊）に『火見櫓は……北一番丁勾当台通角〔現在の県庁構内郵便局敷地〕にあり、当時櫓下には警察本署〔今の県警本部に相当〕ありて彼の仙台名物男四郎と共に名高きものなりしが、明治中年の交腐朽の為これを取毀ちたり其の高さ九丈ありて一名亦九丈楼とも称せられたり』とあるのを見ても知ることができます。また、「自伝的仙台弁」（石川鈴子、昭和41刊）では、次のように仙台方言の一つとして扱っています。『しろばか　名　白馬鹿。色白の白痴の男であった。なんでもトキワ丁あたりで養われ、縁起ものにされるような人で、身なりも上等であった。』「仙台風俗志」（鈴木省三、昭和12

刊、昭和５２復刊）にも『櫓下の四郎　此櫓下に四郎といへる痴呆漢あり。身体の発育は普通以上なれども言語少しも通ぜず、人を見れば男女老幼を問はず、「バァヤ」といひ、芝居の台詞を真似るには只その手足の振舞を以て之を示すのみ。但し此者が妓楼・料理屋・旅館等客商売をする店舗に来れば必ず客の来ること多しとて、到処歓迎せられ福の神として取り扱はれたりし。』「四郎馬鹿と犬殺し三平」（三原良吉、「仙台あのころこのころ八十八年」の内、昭和５３年刊）にも『今の県庁の所に養賢堂があった当時、西北角に火の見櫓があって郵便局北向を櫓下と称した。そこに住む鉄砲鍛冶芳賀某の子、四郎は白痴で櫓下の四郎とも四郎馬鹿とも呼ばれた。とんがり頭でデップリと肥え、唖同様にバャンバャンというだけ、人に仇することもなく、いつもニコニコして市民から福の神といわれた。もじりどてら姿に大きな袋を首にかけて前に下げ、もらい物を入れた。四郎が立ち寄った店は必ず繁昌するといわれ花柳界では大持てだった。反対にいくら手まねで呼んでも見向きもしない店は遠からず倒産したり左前になった。どこの店も四郎が物を買っても銭は取らず汽車も無賃であった。明治の末、福島県須賀川で死んだという。』と記されています。彼はこのように万人に愛される存在であったようです。それだけに彼はその実像に更に伝説的なものが添加されつつ、その死後もいわゆる縁起を重んずる社会の中で永く尊重されてきたのであります。その行動などについて「東北六県下に於ける広告宣伝の研究」（羽曽部健三。昭和２４刊）に次の記事があります。

『仙台極楽男・四郎馬鹿

市内をぐるぐる廻って居ると、旅館・飲食店などに棒縞の羽織をひっかけ腕を組んで坐ったピリケンの面でも冠った様な貌〔かお〕した太った男の写真が掲げてあるのを見る。三十五・六の年配の奇妙な愛嬌のある貌だ。余り処々で見かけるので、先々聞いてみると有名な精神異常者で〝四郎馬鹿〟として僅に今知られて居るとのこと。彼が寄って行った店は忽ち大繁昌するので大切にされたということが知られた。其後尚、処々で得た断片的な彼の資料を集めてみると次のようなことが判った。

彼は大正の初め頃、年も三十四・五で死亡したらしい。仙台の生まれ、生家もどこか分らない。生来の低能児、ごく[(3)]おとなしい馬鹿だった。よく榴岡の花見の人出に来て居て、何もしないのだがおとなしく人の後などについてくることがあった。西郷さんの様にデップリ太って、其の上犬が好きでよく犬を連れて居たらしい。彼は飄々として歩き、余ほど気が向かないと人家などに入らない。所が一度気が向いて彼が入った店、特に料理屋・旅館・水商売の店だったら、その後必ず大繁昌したので、遂々彼は神様扱いにされ、彼の稀に寄る先々は上を下への大騒ぎで彼をもてなす様になった。だから彼はしまいには歩くのは稀で殆ど人力車に乗って歩いていたらしい。彼の行く後からは、物見高い群衆が〝四郎馬鹿、四郎馬鹿〟と言ってついて歩ったとか。〔中略〕今処々方々に掲げられてある写真は利に敏い商人が彼を言いすかして坐らせ撮影したのを肖像画家が拡大描写して売出したものらしい。気狂いもタチのよい気狂だった様だ。〔下略〕。』

なお、岡本かの子が昭和１２年に来仙した時「しろばか」の写真を見、「みちのく」の中の「四郎馬鹿」を書いています。

注(1)　「仙台市史」第１巻に『火ノ見櫓安政３～６年（１８５６～９）仙府絵図には勾当台通養賢堂（戦後の宮城県図書館の地）の西北隅（現北消防署の南向い）に火ノ見櫓がみえている（別篇２「仙台の教育」図版第二〔第四、第五が正しい〕をも参照）。「出火相図之鐘三ケ所　北一番丁火見櫓　向山虚空蔵鐘　亀ケ岡八幡社鐘」（奥陽名数）』。第２巻に『消防については明治２年勤政庁下軍部寮衛守陣に属するものがあり、〔中略〕北一番丁には火の見櫓を設けた。』また「仙台市史」〔明治版〕にも『明治２年、北一番丁に火見櫓を設けたり』とあるのがそれである。

なお、「仙台消防誌」に『元文３年〔１７３８〕国分町から火見櫓を北一番丁に移した』と記し、その出典を「東藩史稿」としているが、「東藩史稿」にこのような記事はない。

注(2)　「目で見る仙台の歴史」に『火見櫓勾当台北一番丁角養賢堂構内に立っていた。よってこの辺を櫓下と呼んだ。』とある。

注(3)　この年代には真実性がない。何故ならば、櫓下四郎の異名の出た北一番丁の火見櫓は明治２０年代には廃止されてしまい、その代りに市内十数か所に火見梯が設置されたので、櫓下などという俗称町名は自然消滅してしまった。また明治１５年の「宮城人物見立」に取上げられた櫓下四郎を、大正初年３０才台で死歿の人としているのは余りに時代がずれ過ぎているからである。

勾当台火見櫓廃止について「わしが国さ」第３６号（仙台協賛会）に『北一番丁勾当台通りの火見櫓の鐘は明治十四、五年頃まであったが、今は青葉神社に移されてある。』とあり、「仙台鹿の子」増補版（著者不詳、元禄８年序。鈴木省三校補、明治３１刊）に『勾当の台（桜）鐘堂は県庁構内にて北一番丁勾当台通角の高みにあり火災あればこれを打て警を報じたる所なり維新後も久しく其侭になりてありたれども追々朽ち損じたるが故にこれも取り毀て今は形もなし惜むべし』と火見櫓廃滅について述べている。

資料　仙台人名大辞書（菊田定郷）
自伝的仙台弁（石川鈴子）
仙台風俗志（鈴木省三）
東北六県下に於ける広告宣伝の研究（羽曽部健三）
仙台繁昌記（富田広重）
仙台あのころこのころ八十八年（仙台八十八選選定委員会編）
仙台消防誌（仙台消防組編）